

世界有名紙卷煙草

煙草大王 米國煙草會社製

日本農商務省 登記商標
於此經濟

日本代理店

東京 新橋

江副商店

電話新橋 九百五番

ピシヘッド

(パイプ入)

全國 到處

ライト

(パイプ入)

に於 販

サイクル

賣す

明治三十二年四月廿日發行

第五卷 第九號

紀元 二千五百五十九年
西曆 一千八百九十九年

(己亥)

太陽

論說

音樂と最大快樂

伊澤修二

凡そ人の世に處するや、悲むべき事憂ふべき事の絶ゆる時なく、人世は眞に悲惨なるものなり。されば、この世に處するに當りては、何人も或る快樂を得て、以て精神を安慰するの法を講せざる可らず、その快樂は人の位地業務によりて、自ら相異なるべけれど、社會に於て最も大なる事業を成す人は、政治家にあれ、

學者にあれ、農工商に従ふものなれ、その憂ふるところ最も深きものなれば、從て彼等に對しては、最もよく精神を安慰するの必要なるは喋々するまでもなかるべし。抑快樂と稱する中には、數多の種類あり。又程度の高きあり、低きあり、乃ちその種類には如何なるものありや、又程度に於ては如何なるものを以て高しとし、如何なるものを以て低しとするか、これ次に起るべき問題なれば、先づ之を解釋し、進で快樂の一なる音樂は如何なる種類に屬し、如何なる程度にあるものなるかに論及すべし。是等の考究をなさんには、まづ人は如何なるものなるかの研究より始めざるべからず。

人は精神と肉体とより成るとは、一般の通論なり。されど、その精神とは如何なるものなるか。又精神と肉

体との關係如何の點に至りては、頗る難問にして、古來各國の賢聖と稱せられしもの、殊に近世に至りては、哲學者等の研鑽せるところなれども、其說多少異同あるを免れず。要するに、人にはその肉体以上に、一種高妙なるもの、存することは、彼等の等しく認むるところなり。近時「マテリヤリスト」即ち所謂唯物論者と稱する一派は、頻りに人に良心ありとの説を排撃して剩す所なきも、結局彼等の所説といへども、又一種不可思議の靈妙なる境界ありとの事に歸するが如し。之を要するに、人には肉体以上に何者かの存する事は、何人も疑はざるどころにして、余もまたしか信ずるものなり。爰に余の説―換言すれば古來の學說の、自然余輩に傳はりしもの―を述べん。抑、人は天地の靈氣と人体の肉氣と稱するものとより成立す。靈氣は人体に入らざるに當りては、是もなく非もなく、無始無終にして、宋儒の所謂虛靈不昧の説の如きも、之に髣髴たるものなるべく、又獨乙著名の哲學者ヘルバルト氏の所謂ソール即魂も亦殆ど之に全じ。その無始無終なる靈氣は、人体の肉氣と結合して、こゝに始めて人の人たるものを形成す。故に靈氣は萬民同等にして、賢不肖の別存するなし。而して人に賢不肖あるは、肉

の順序を轉倒し、身舌鼻眼耳の順序によりて説明せん。

第一 身即ち觸覺より來る快樂。―此快樂は例へば小兒を見るときは、我指頭を以てその顔に觸るゝか、若くはその手を握るか、或はその頬に唇を接するかの如き類にして、直ちに身體の接觸するより感ずるところの快樂なり。この種の快樂は、最も濃厚にして、肉氣相感するの度最も多きに反し、靈氣を距ること最も遠く、道德の標準に照らす時は、最も低度のものたり。その發達して稍く高尚に進めるものは、歐米の舞踏にして、一方には音樂を假りて快情を興起すれども、今日文明社會にては、舞踏を爲すには種々嚴格なる作法あり、必らず手袋を用ゐるべしなど、禮を以て之を制せり。序ながら附說せん古來樂を行ふに當り、禮を以て之を制するは、道德上切要なること、せり。禮樂並行せざる時は、その極一方に偏して弊を生ずるの恐あればなり。

第二 舌より來るところの快樂。―これは、物の味を味ふの快樂なり。其味の最も濃なるは肉類にして、肉の中にても獸肉最も濃に、鳥肉魚肉之に次ぐ。若し食人種をして言はしめば、人肉こそ最も濃厚なれと言ふな

体上の腦髓その他體質の構造の不完あるにより、靈氣の作用も亦良否巧拙の差を生ずるに至るによる。故に教育を人に施して、之を發達せしむるは、既に靈氣と肉氣との結合後に於けるものたること明なり。而して智力に關する教育は、多くは肉体上の腦髓の如きもの、作用によりて發達するに反して、性情なるものは、直ちに靈氣に關係を有するもの、如し。抑人のものを樂しむは、理論を考究して後にしかするものにあらずして、或は見、或は聞き、或は嗅ぎて、直ちに靈氣に感じて快樂となり、或は憂苦となる。故に靈氣に最も關係あるは、思慮考察以外に存すといふも可なり。而して各種の快樂の靈氣に達する迄の機關は、從來世上に言ひ來れる眼耳鼻舌身の五門戸にして、是等を経過し來りて、或は樂、或は苦となる。依て以下是等各門戸に屬する快樂の種類は如何、その各種快樂の程度如何に關し、一々證例を擧げて説述せん。

凡そ快樂の程度に關し、其高下を定むる標準如何といふに、この點に於ては、靈氣と肉氣とに對する關係全く相反す。即ち肉氣に最も近きものは最も低くして、靈氣に最も近きものは最も高し。故に先づその低きより高きに及ぶの順序により、在來の用語の眼耳鼻舌身らむ。即ち人体の肉氣に最も近きものは最も濃厚にして、これを距ること愈々遠きに從ひ、益々澹泊となるものなりといふを得ん。猶一步進みて、食菜に就ていへば、穀物の如きは多少濃厚なれども、蔬菜は澹泊なり。終に水空氣の如き無機物に至りては、益々澹泊となり、益々優尚なるものとなること疑なし。其所以は、肉類は一喫の下其味美なりといへども、毎食これを喫するは堪ふるどころにあらざるべし。然るに、水と空氣の如きは、其味の無味なるに關らず、寸時も欠くべからざるものなるを見ても、後の二者は靈氣には極めて近きものたると同時に、肉氣には大に遠ざかれるものなること明なり。故に同じく舌より入り來る快樂にても、肉より蔬菜、蔬菜より水、水より空氣といふが如く、低きより次第に高きに進むものと見て不可なからん。

第三 鼻より來るところの快樂。―さきに述べたる身及び舌より來る快樂は、何れも身体と物質との接觸より生ずるものなりしが、鼻より來る快樂に至りては、其感を起すものは物質なれども、固形体流動体にあらずして氣體なり。即ち一層靈氣に近きものなり。而してこの場合に於ても、肉氣を帶ぶるものは低くして、

これを距ること遠きもの高しとの理法は、曾て變ずることなし。例へば鰻屋の前を通過する際に感ずるものは、悪臭にはあらざれども、花の香例へば薔薇より發する馥郁たる香氣と比較するときは、前者の後者に比し、一層低きものなることは明ならん。さて鰻は動物、花は植物にして、共に有機物に屬すれど、猶遙に進みて、煙り例へば名香を焼く時に起れるものを感ずるが如きは、又一層高きものなる事を知るなるべし。その所以は、一方は有機体なるを以て、猶幾分か肉氣に近きも、名香の如きは有機物の焼け盡る際に生ずるものにして、殆んど無機物といふも可なる程なれば、愈々靈氣に近づくに至ればなり。

第四 眼より來る快樂。この快樂の類は種々あれども、その中最も肉氣を帶ぶるは演劇なり。演劇は現に人間の爲す事をそのまゝに現はすものなれば、直ちに同情の感を興しその愉快なるは固よりなれども、日々之を觀ば、如何なる好劇者も避易すべし。以て眼より入る快樂の中、最も濃厚にして、其程度甚だ低きものたるを知るに足らん。次に彫刻は、動植物或は人類の像を摹造せるものなれば、亦肉氣を離るゝこと能はず。されども、此等演劇彫刻又後に述べんとする繪畫に於

妙味あることを悟るべし。されば、この種の快樂も、肉氣に近きもの、低くして、肉氣を離るゝこと遠きに從ひ、次第に高尚となること明ならん。抑眼の物象を感ずるは、眼底の網膜に、物体より發する光線を受け、その光線の顫動の模様により、種々の色彩明暗を感ずるものなれば、其衝動は、最早物質を離れたる一種の勢力となり、從て鼻より感ずるものよりも、一層親しく靈氣に達するを得べきものなること明ならずや。

第五 耳より入り來る快樂。此種の快樂も、亦眼よりするものと同じく、一種の顫動により、即ち前者は光線に依り、此者は空氣によるものにして、五門戸より入り來るものの中、最も高尚なるものなり。其故は、眼にて見るものにては、縦合古人の畫ける名畫なりとも、物形を假るにあらざれば、其目的を達する能はず。然るに耳にて聞くものに至りては、少しも物形を假ることなく、從て形而上の靈氣には、最も近く最も達し易きものなりといはざるべからず。余が之より仔細に説述せんとするは、この耳より入るところの快樂、即ち音樂なり。

音樂に於ても、亦さきに説き來りし理法を適用して、更に支吾あるを見ず。抑音樂中、最も肉氣を帶ぶるは、

ても、何れも今日現に吾々が實見するところのものよりも、既に過ぎざりし時代に屬せる事を摸せるもの、方、遙に高尚に感ぜらる。是れ吾々の肉界を去ること、愈々遠きによれるなり。例へば演劇に於ても、今日某座にて興行する近時某所の人殺などといふが如き世話物と、忠臣藏の如き古き時代のもの即ち時代物とを比較せば、何人も古きものを以て高尚となすに躊躇せざるべし。彫刻にても亦然り。例へば婦人の像にても、東洋なれば印度、若くば日本の古代の装ひせるもの、歐洲なれば、希臘のアポロの神像等の如きを以て、現今流行の服裝せる女像と對比せば、何人も古代のものを以て高尚となすならん。猶繪畫に就ていへば、浮世繪と狩野繪とを比せば、前者或は美しからんも、高尚の點に於ては大に劣れり。又狩野家にても、十分彩色せる人物畫は、美は美なりといへども、古名手の墨畫の龍虎等と比せば、後のもの、品位の高きは明ならん。又墨畫の龍虎よりも、山水の如き閑雅なるものは、猶一層高尚と感ずべし。最後に、極めて古名家の手になれるものにして、その墨痕の畫たるか何たるかすらも、凡眼には判知し得られざるが如きものを見れば、既に繪畫の縁たる實質界を離れて、單に天真のみを存するの

聲樂即ち唱歌なり。何となれば、歌を唄ふときは、咽喉に在るところの肉塊即ち聲帶を顫動せしめ、口腔を経て遂に其顫動を外氣に傳へ、以て音に高低強弱を生ずるものなればなり。其唱歌の中にも其程度或るものは高く、或るものは低きことは、後に説くべきが、概して歌は人の性情に發し、喜怒哀樂等の諸情を、その聲色によりて發現さるゝものなるか故に、歌には全く人体の肉氣を離れしものを望むこと能はざるなり。

有名なる音樂家メンデルソーン氏は無言の歌を作れり。氏は謂へらく、人の理想を現はすに、言葉に依る時は、音樂の至極の妙所を現はすを得ず。故に樂律のみを以て歌に代らしむべしとて、遂に「ソングス、ウキザアウト、ウアルツ」なる樂曲を作れりと云ふ。

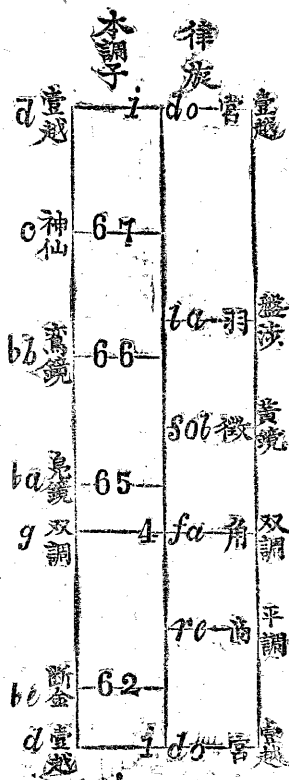
さて唱歌の如く、言葉を入聲に現はす時は、全く肉氣を離るゝ能はざるが故に、この目的を達せんには、樂器の力によらざるべからず。樂器にも、其品質に高下なき能はず。先づ三味線につきていへば、其絃には絹糸を用ゐる、其胴には猫皮を張り、之を弾するには象牙の撥を用ゐる。是等はみな動物物質より成れるなり。其他の部分は木材なるを以て、之をいふの要なし。その樂器の構造、斯の如く肉氣を帶ぶるものより成れ

るを以て、之より發する音は亦肉氣を帯びざる可らず、故に如何に堪能なる名手が、如何なる名曲を弾き、又は之を假りて、歐洲の優美なる樂曲を弾くも、到底三味線は三味線以上の音、即ち肉氣を離れし音を發する能はず。次に琴につきていへば、絃は三味線と同じく絹糸なれども、胴は桐にして、澹泊なる木質なるを、以て、三味線に比すれば音色高尚にして、肉氣の少なきは明なり。次に琵琶はその絃及胴とも琴と同じき品質より成れども、胴は桐にあらず、花欄或は桑等を用ゐるよりして、一層雅音を發するに似たり。以て一層肉氣を去るを知るべし。次に笛は琴三味線に比して、一層有機的現象を去るものなり。笛は木或は竹にて造り、空氣を顫動するには琴琵琶の如く糸の力によらずして、單に唇の顫動を空氣に傳へ、空氣は其顫動を聽官に傳へて靈氣に達するものなるを以て、肉氣を去ること一層遠し。笛には木及竹の外、銀の如き金屬にて造れるものあり。今この三種の笛と、其音とを比較して見るときは、金屬にて造れるもの、音最も高尚に聞ゆべし。又洋琴の如きに至りては、琴琵琶等と同主義の構造なれども、一方は絃に肉質を帯ぶる絹糸を用ゐ、一方は無機体に屬する鋼鐵の線金を用ゐるを以て、其

音色、琴琵琶よりも、一層牙々しく高尚なるが如し。斯く次第に論究し來れば、樂器も亦肉氣を去るの遠近によりて、品質の高下を生ずること明なるべし。されど、樂器には猶物質的臭味あるを以て、完全の域に達する能はず。遂には一物もなきを可とするに至らん歟。彼陶淵明の無絃の琴、禪家の無聲の音聲といふが如き境遇に至りてこそ、眞に高尚なる靈氣に達するを得るにはあらざる歟。こは頗る空論の如くなれども、さきに漸次余の述べし理法を、事實の上に照して的確なりとせば、靈氣に達するに最も近きは、肉氣を距ること最も遠きものなりとの結論に歸せざるを得ず。而して人の身体を養ふには、肉氣に屬する物質を以てせざる可らざると全しく、人の靈氣を養ふには、又之を養ふに適せるものを以てせざるべからず。抑この社會に在るものは、弱肉強食の複雑なる世故に接せざるべからず。從て十分に靈氣を養ふことは能くするところにあらずされども、縱令一時若くは半時たりとも、幾分か靈氣を養ふ事を得ば、是れ眞に人間の最大快樂ならずや。然らば之を養ふ方法として、音樂は如何なる位地にある乎。換言すれば吾人凡夫にありては、混然解脱して萬物と同体となるが如き域に達するは、得て望む可ら

ざるも、多少靈氣を養ふの一事は、常に注意を怠るべからず。而して其靈氣を養ふ一端として、音樂を用ゐば如何。又之を用ゐるには、如何なる種類の音樂を適當なりとせんか。以下少しく論述する所あるべし。音樂の中には、其程度高きものあり、低きものあり。其趣味淫靡なるものあり、高雅なるものあり。かゝる差異の生ずる所以を考究するに、其原因より多般なりと雖も、第一は旋法の相異なるに基くものなり。今其大体を説かんが爲め、例を我俗曲と雅樂とに取らんに、三味線調と雅樂調との旋法を比する時は、雅樂に於ては、宮商角徵羽の五聲の排列は、律旋に於ても呂

ものなるが、雅樂に於て、律旋と呂旋との二種あるが如く、俗曲には、本調子、二上り、三下りと、大体三種の差異あり。先づ之を略説せんに、雅樂の律旋に於て、宮商角徵羽の五聲と稱するは、歐洲の音樂に所謂「ド」「レ」「ファ」「ソル」「ラ」に全じ。此五聲には、各固有の役目あり。之を軍隊の編制に例ふれば、大隊長中隊長小隊長乃至下士官の必要なるが如く、音樂に於ても、亦是等各將校に相當する者なき時は、音樂上の動作を爲すを得ず。音樂に於て、恰かも大隊長ともいふべきは宮の音にして、徵は中隊長、角は小隊長に當る。徵は最も重要な關係を有すれども、全体の隊長は、要するに宮にあり。而して商はその傍にありて働らく傳令使の如し。そはこの略圖を見て明亮ならん。俗曲に於ては、本調子なれ、二上りなれ、三下りなれ何れの調子に於ても、雅樂の宮と同一なる主音あり。徵に當る音も角に當る音もあるなり。殊に商に當る音もあれど、その位置は、常に宮の音の直上にありて、宮に逼るの状をなす。之を詳説すれば、雅樂に於ては、宮より商に至るまで二律あるに、俗曲に於ては、其間唯一律あるのみ。故に大隊長たる宮は、直ちに上なる商の爲に壓せられ



旋に於ても、適當なる位置を有するに反し、俗曲に於ては、之に異なり。先づ右の圖説に就きて了解せよ。此圖は、雅樂の律旋と俗曲の本調子の特質とを示したる

故に大隊長たる宮は、直ちに上なる商の爲に壓せられ

て、十分に命令するを得ず。又角の上の音も、律旋に比する時は、一律下がりにて之に迫り、角をして十分の働をなすを得ざらしむるのみならず、其音自らは即ち中隊長の職を務むべき徴に當るものなるに、これすら適當の位置より一律下位にあり。又羽に當るものも、律旋に比すれば、一律低きところにあり。俗曲の旋法は、斯の如くなるを以て、例へば戦争に臨み、如何なる武勇の隊長あるも、その命令を傳ふべき傳令使、却りて之が妨害をなし、隊長の行動を抑壓して自由ならしめざる時は、遂に勝を制すること能はざるに至るが如く、到底活潑なるもの、又は極めて清雅なるもの等は、此旋法によりて奏するを得ず。これに反して、極めて悲しきもの、又は甚だ淫靡なるものなどを奏せんとするには、此旋法却て適當す。その故は隊長たる宮は、商に向ひ、高き聲によらざるも、低き音にて命令するを得ればなり。故に或る一種の性質を帯ぶる曲の外は、如何に俗曲に堪能なる名手ありて、名曲を作らんとするも、此旋法に依りては、決して高雅なる曲の成るべき理なし。

以上に述べしところによりて、樂曲の高尙なるもの、下品なるもの、又は悲むべきもの、喜ぶべきもの等の制作は、主として樂律の旋法如何によるものなるを知

明治の初年まで生存せし人なるが、其言に、われ一たび筆樂を吹けば、妙音天我に乗り移りて、われ自ら妙音天となると云ひしとぞ、その樂みや實に無量なるべし。是等は妙技の極に至りし人の境遇にして、我々の企及するところにあらずといへども、その事實なるは疑ふ可らず。音樂にして天地の靈氣に合し、我れ音樂なるか、音樂われなるか、所謂天地の靈氣と一体になりたりし時の有様は、眞にかくの如くなるべし。假令かゝる古樂の力により、かゝる境遇まで至り得ずとも、今日我々の時代と境遇とに適すべき音樂なからざらんや。乞ふ之より少しく解説を試みん。

夫れ音樂は天地の靈氣に基き、人情の自然に發せるものなりとせば、古今東西の間、甚しき差異あるべき理なし。然るに、人或は我國の音樂は西洋の音樂に異り、彼音樂は我國情に適せずといふものあり。それ果して然るか。抑此問題は余の二十年來考究せし所なれば、今その概略を説かんに、日本の音樂—俗曲を除く—と歐洲の音樂を比較するも、甚だしき差あることなし。かゝる洋樂の我在來の樂に異なるところは、歐洲に於ては、最近五百年間に於て、音樂上長足の進歩をなせることにして、即ち所謂「ハーモニ」の理法を研究して、

るべし。故に全に俗曲の中にも、本調子よりは二上りの方幾分か活潑なり。その故は、二の糸の調子、二律上りて、徴の音調となり、從て適當の位置を占むるを以てなり。三下りに至りては、宮の音、猶二律下るを以て、益々墮落して下劣なるものとなる。故に、苟も音樂を嗜む者にして、若し或る種類の俗曲に耽るが如きことあらば、其精神、愈々靈氣に遠かり、むしろ肉氣に近き方向に陥るに至るべし。雅樂に至りては、其趣味の高尙なる、更に言ふを待たざれども、今日の社會と雅樂の發達せる時代とを比すれば、その時勢全く異なるを如何せん。吾等もし一千餘年前の時代に在りと假想し、全く今日の世事を放擲して度外に措き、雅樂三昧に悠々として日を暮すを得ば、誠に愉快極まりなかるべし。曾て雅樂中近世の名家を以て稱せらるゝ某公卿に接せることありしが、その言に曰く、われ琵琶を彈じ初むるや、神は直ちにわが頭上に移り來ると。又或る伶人は、われ等三管の合奏をなすに、眞に能く調和せる時に於ては、全く彼我萬事を忘却し去り、たゞ奏し終りし後始めて我に復るの想あり。奏樂中は、所謂天地と同一なる境遇に至るもの、如しと語りし事あり。かゝる域に到達せば、實に愉快なることなるべし。又近世雅樂の名人といはれしは、安倍季資にして、

之を實地に用ひたる點にあり。ハーモニは譯して和聲又は調和といふ。然るに、我邦の雅樂は隋唐の樂を傳へて以來。我邦にて多少新に作りしものなきに非れども、所謂朝廷の樂にして、朝廷にのみ用ゐられ、民間に用ゐられざりしを以て、自由の發達を遂ぐるの機會なく、朝廷の雅樂師たる伶人中にも、笛は何家、琵琶は何家といふが如く、各専門の家筋まで定まりて、他には全く秘せられ、今日に到りても、或る一部分は未だ公にせられざるものありと聞く。秘曲妙技は一部人士の専有に歸して、發達するの途なかりし故に、その樂曲の今日に傳はりしものは、殆んど隨唐傳來のまゝ、一步も進む事能はざるの有様にして、今日は此等すらも或は絶えんとするの虞あるなり。されども、大跡に於て日本の雅樂と稱し來りしものと、歐洲の今日の音樂とは大なる差なしと信するなり。余は曾て希臘の古曲として傳はれるアポロの讚歌を、芝葛鎮等の雅樂師に托して、三管二絃即ち雅樂の管絃樂に調和せしめし事ありしが、米國の音樂教育家メイソン氏は之を聞きて、大に感嘆し、彼希臘時代に行はれし樂調は、現在日本に存するものと同一にはあらずしか。實に希臘の古も追懷せらると言はれたり。希臘の頃より歐

洲の音楽は漸次發達して、最近五百年の間に頗る進歩せしが、我邦に於ては、悲い哉平安朝以來、少しも發達せざるもの、如し。支那の音楽も、周の世より孔子の頃までは極めて良好のものありしなるべし。孔子の言によれば、支那にも幾分かハーモニーの如きものありしにはあらざるかと思はしむる點なきに非ず。要するに、今日の洋樂と雅樂とは、大なる差異なし。然るに、歐洲の音楽と今日世に行はるる我俗曲とは、甚しき差異あり。歐洲にても、希臘時代に溯れば、我俗曲と全然同一なる旋法ありて、希臘の十二旋法中の二種は、我俗曲の本調子と二上りとに均しき調子なり。余の考究せし所によれば、我俗曲と稱するものは我邦固有の調にあらずして、中古の所謂南蠻即ち葡萄牙より傳來せしものなりと信す。少なくともいづれ外國傳來のものたるは疑なし。或は日本の三味線の曲は、琉球より來りしものなりとする者あれども、大なる誤なり。余曾て琉球人に、彼國の曲を彈せしめ、其旋法を試験せしことありしが、彼曲は全く支那近世の旋法を受け來りしものにして、さきに既に述べし如き俗曲の特徴たる、宮の上にて一律、即ち半音を有する調子とは、全く異なれり。此一種特別な我俗曲の調子は、近き

モニーを以て奏する音楽は、恰も洋風に作れるブケイ即ち花束に比すべき歟。此は各種の美麗なる花を集め來り、その形の如きは必ずしも注意せず、二團若くは三團の圓塊を造るに過ぎず。されどブケイに於て最も注意するは、各種の色の調和に在り。一方に紫あれば、その傍に赤を置くべからず、この處に青あらば、かそこには白を置くべしなどいふが如く、爛熳なる無數の花輪間に、自然に色の調和ある如く造らざるべからず。然るに、我俗曲は之に反して、恰も立花の術に於けるが如く、餘り多くの花卉を蒐むるよりも、其種類を一二に止めて、二三の枝五六輪の花にて、看客を感動せしむるを旨とし、幹と枝との矯め方に心をこめ、極めて優美の弧形を作り、陰陽互に調和せしむるどか、又は上枝を受けん爲めかくくの枝を下方に置くどか、花も漫りに多くせずして、此處に二三、かしこに一二と、點點散在するが如くにして、その姿のすらりとして、美しく賞すべきが如くなさざるべからず。斯る巧緻の點に於ては、俗曲は大に努めたるものといふべし。其譯は單に三筋の糸にて奏するも、又は數多の樂器にて一時に奏するも、大體一律同調に奏するものなるが故に、長く同じ調をなせば、聽衆を倦怠せしむるの恐

亞細亞洲内に於ては、何れの邦にも發見するを得ず。然るに歐洲の音楽史に依るときは、十七世紀の頃、葡萄牙に行はれし旋法中には、かゝる調のものありて、その調子の曲を呂宋に傳へし事も、彼音楽史上に見えたり。されば、當時葡萄牙人が、根據地を呂宋即ち今の非律賓に定め、宣教師の屢々我邦に往來せるに際し、三味線の元器たるラベカ(胡弓の一種)を輸入し、之と共にその調子をも傳へたるものなることは、殆んど疑ふ可らざることにして、之は容易に證明するを得るなり。故に我俗曲は外國傳來のものにして、我邦固有の音楽にあらざること明なり。まかし其詳しき事は、こゝに要なきを以て略す。さて我俗曲と歐洲の近世音楽との異なる點如何といふに、第一旋法に於て大に異なるは、さきに述べしが如し。第二には洋樂はその發達と共にハーモニー之に加はれるに、俗曲は宮の上に半音を有するが如き旋律なるを以て、ハーモニーを入るゝこと能はず。是を以て、彼方はハーモニーの方に向ひて頻りに發達し來りしに反し、此方はハーモニーなくして、しかも聽者を満足せしめ、感情を惹起さしむるの方に發達せり。今卑近の譬を取り、聽官に代ふるに視官を以てして、二者の別を説明せば、歐洲のハー

あるを以て、種々の拍子を入るゝどか、或は調を轉ずるとか、所謂立花師の幹や枝の矯め方に當るが如き伎倆には、非常なる苦心を費せしものなり。故に音楽論より觀察すれば、拍子に於ては、俗曲大に發達し、洋樂も雅樂も決して之に匹敵する能はず。これその特技と稱すべき乎。以上に述べしところは、歐洲の音楽と我在來の音楽との大体の差異なり。

斯の如く論じ來れば、我在來の音楽中。雅樂は其技術の特に一部に偏せると、時世の大に變遷せるとに依り、今日普通の樂としては、殆ど行はる可らざるものならん。又俗曲は個人の樂として、優美なるものを撰びて弄ば、可ならざるにあらざるべきも、數多の人を會して、其樂を共にするの點に於ては、頗る欠如たるを免れず。元來音楽の社會に裨益を與ふる所以は、多岐に涉ると雖も、必竟衆と共に樂むに在り。百千の人を一堂に集めて、一齊に皇運の無窮を頌し、國家の長久を謳ひ、神人相和し、天地相應じ、熙々雍々たる樂境に入るが如き、最大快樂を得せしむるもの、音楽を措きて、將た何にか求めん。而して此目的を達せんには、今日世界に於て、最高の發達を遂げたる西洋音楽の理法に依り、我國粹を發揮するが如き樂風に依らざるを得ず。

噫我音樂の發達、此點に到達するも、蓋し遠きに非ざるべきか。記して、以て後の君子を待つ。

奢侈論

法學博士 添田壽一

第一章 總論

俗諺に曰く「奢るもの久しからず」と古今東西を通じての金言なり。彼の堂々たる羅馬帝國を倒したるも奢侈なり、佛王路易をして斷頭臺上の露と消えしめたるも亦奢侈なり。之に反し一小侯國たるフランデンブルヒをして普漏西王國となり、尙ほ進で獨逸帝國の霸權を掌握するに至らしめしはフレデリックの奢侈を嚴禁したるに因る。近くは西班牙の衰頹、土耳其の屈辱、皆奢侈の暴政に伴ひし結果なり。我が朝に於ても平家の没落、足利の末路、幕末の事蹟、皆一として奢侈の國家を亡し社稷を危くし、家産を傾くるの例證たらざるはなし。嗚呼奢侈の弊害何ぞ夫れ激甚なる。然るも尙ほ世人が往々にして其の侵害する所となりて、毫も顧省する所なきに似たるは抑も何の爲めぞや。奢侈の性

資産收入あるものに必要なるものも、細民に取ては奢侈となることあるべし。又一般生計程度の高低、氣候の寒暖等により甲國に於ける奢侈品も乙國にては必要品たるものもあるべし。均しく必要品に在ても正當の分量を超過するときは奢侈に涉る場合なきにしも非ず。故に奢侈如何は各人の地位、各國の狀況、分量の多少に由りて判定すべく架空(アブストラクト)、絶對(アブソリュート)に斷定し難きものありと雖も、冒頭に限定したる標準に徴し生存、開進、生産力、幸福に裨益なきものは奢侈なりと謂て可なり。例へば本邦の現狀に於て一般普通人の用ふる重要衣食物に就て云ふときは綿布、鹽、味噌、醬油、薪、炭、野菜の如きは日用の必需品にして、糸入織物、砂糖、魚類、牛肉、菓子等の如きは普通用品とも謂ふべく、絹布、酒、烟草の如きは奢侈品たるが如し。

第二章 奢侈の起因

奢侈の主因とも謂ふべきものは人心の傾向より發生す。即ち虚誇、修飾、肉慾、好變の如き人性の弱點に外ならず、又此等主因の發動の助長する副因なるものあり。例へば制度の過失若しくは戰勝、金銀坑の發見、

質弊害を熟察せず、制度も亦之を矯正するに緩慢なるが爲めなり。況や世界列國及び人種間の競争は主として經濟上に存し勝敗は經濟力の強弱に由て分る。而して今や帝國も亦彼の改正條約の實施に由り益々此の競争場裏に進入せんとす。故に能く終局の勝を制せんと欲せば國民の經濟力を鞏固ならしむより他に策あるべからず。然るに邦人の尤も缺乏せる所は經濟力に在り、經濟上の缺點は奢侈に流れ活動力に乏しきより生ず。果して然らば力を奢侈の抑制に用ふるは、帝國の現在將來に取りて一大急務なりと謂ふべし。

第二章 奢侈の定義

奢侈(ラキユチュリー)とは何ぞ。生産力又は有形無形の論なく人類の生存、開進、其の他合理的(ラシヨナル)幸福増進に裨益なく却て有害なる消費を云ふ。即ち生存に缺くべからざる日用必需品(ネセッシチース)は勿論、正當なる幸福と生計の程度とを昂進せしむるの用を爲す所の普通用品(ゼチラル、ユース)の如きは奢侈に非ざるなり。此の以外のものは總て之を奢侈品と稱せずんばならず。然れども奢侈は多少相對的(レラチーブ)の性質を有するを免れざるが故に、巨額の

投機心の勃興、其の他社會の風潮の如き是なり。請ふ各原因につき少しく細説する所あらん。虚誇(ヴァニター)は最も賤むべき人情の弱點にして、人の有せざる所我れ之を有すと誇り、徒に他をして羨望せしめて快と爲す。此の如きは實に卑劣の極にして徳性を具ふる男子たるもの、大に慎むべき所なり。修飾(ラステンテーション)も他見外觀の美を主とするに存し、野蠻人又は婦女子に於て最も發達せる弊習なり。彼の野蠻人の滿身刺黥を施すが如き、婦女子の盛裝紅粉を以て其の醜を蔽はんとするが如き、皆修飾の實例たり。而して其の甚だしきに至ては質撲、純麗、高尚、優美と相容れざるのみならず、天然の美を損し、健全、清潔に害あるを免れず。世上誤て美術と虚飾とを混淆するものありと雖も、虚飾は却て眞正の美術を傷害廢頹せしむ。現に希臘羅馬の美術も奢侈の風潮に汚瀆せられたるに非ずや。美術の妙味は天真爛漫たるに存す、虚飾は天然に反する最も大なるものなり、兩者豈同一視すべけんや。

肉慾(センシエアティー)の作用は人をして酒池肉林に沈溺せしめ、過度不經濟的の消費に流れしむ。現今富豪の食卓には殆ど常人食量の堪へ能はざる山海の珍味